新潟県教育界における「学閥」問題（第五回）

にいがた県民教育研究所「学閥」研究会

第二章　「学閥」は何をしてきたのか
――その歴史にみる「学閥」の本質（その二）――

「学閥」の生き残り作戦とGHQとの接触

「ときわ会」や「公孫会」の師範閥は組合運動をつうじて戦後の教育再生運動のイニシアチブを確保するのにとりあえず成功した。しかし、戦前・戦中の「学閥」の組織と利権をそのまま維持できるかどうかはGHQの意向に大きくかかっており、さらに師範学校の廃止と新制大学の発足という新しい条件にどう対応するのかという問題も残されていた。とくに、GHQから解散命令が出されることを恐れていた。占領下での新潟県は東北六県とともに仙台に司令部を置いた第九軍団軍政部の管区に属し、新潟での司令部は新潟市公会堂に置かれていた。「ときわ会」では一九四八年ごろから会長今山政三郎を中心に「新時代に即応する体制」の検討に着手していた。GHQが当初の民主的諸政策の実施から、この頃になるとしだいに労働運動や日本の民主化運動の弾圧にのりだすようになっていたことは、「学閥」にとっては好都合であった。

「学閥」はこれまでみたように、侵略戦争と軍国主義教育に積極的に加担し、子どもを戦場に追いやり、また管理職ポストの私物化とその抗争をくり返し、「新潟県教育界の恥部」として県民の批判をうけてきた。したがって、これらに対するまじめな反省があれば、「学閥」は当然、解散してしかるべきであった。「反省がない」ことは八〇年余の歴史を通じて一貫して認められる「学閥」の重要な特質の一つである。けだし、まじめに反省すれば「学閥」の存在そのものが疑わしくなる。したがって、「ときわ会」や「公孫会」にあっては戦前の教育感覚がそのまま今にひきつがれている。戦後の教育の民主的再生・民主教育の確立にむけての教師の努力については無知・無視または敵対

の対象でしかありえず、現今の教育の右傾化路線やそれにもとづいた管理強化路線には無批判に追随している。天皇や軍人崇拝は今だに骨身にしみつき、「君が代」や「日の丸」を条件反応的に「ありがたがる」感覚もしみついている。さらに「公孫会」にあっては戦後の教育の民主的転換よりも戦前・戦後を通じて高田師範・高田分校の存続問題が最大の関心事にされており、そのことが「地域運命共同体」意識をあおって「公孫会」に対する批判を封じ、利権集団としての本質を隠蔽し、管理職などの公的なポストがあたかも「共同体の財産」であるかのように錯覚させてきた。

さて、今山政三郎の県教育委員への転出にともなって「初代」ときわ会長となった長谷川清はこの間の事情を次のようにのべている（ときわ会報百号記念特集、一九八一年）。

「私が白山校長に発令されたのは昭和二十三年十月末である。近隣する市公会堂にはＧＨＱの教育部があった。新教育の推進について指導助言を受けている際である。日本の教育刷新上支障となっているのに学閥抗争がある。これが弊を根絶するためには組織に対し解散命令が出るかも知れないとの真意が察知された。私はかかる緊迫情勢に対処するため、他に率先して新師同窓会の発展的解消の急務を会員に訴え、理解を求めた。そして新時代の要求に即応し、教育の本質を基調とする研究・切磋・親和する同志的な組織として規定するべきであるとの結論に達し、新組織の名称も常盤でなく「ときわ会」と平仮名で表示した。」この間、新潟第二（高田）師範学校を会場に行なわれた各師範協議会（一九四八年一月二四日）では第九軍団教育局長マーチン、それに新潟のライト、メイヤーのＧＨＱの三名の担当官を前に「学閥感情」がまともに露呈してしまった。この「マーチン会談」には新潟第一師範男子部、女子部、第二師範、青年師範の代表者のほか、ときわ会と公孫会の代表各三名も出席し、司会は新潟医大の伊藤辰治であった。マーチンの助言は①教員養成はりっぱな総合大学で行なわれるべきである。優秀な教員の一人は質の劣った十人にまさる。②総合大学の諸学部は、原則として一ケ所に集中されるべきだが、二か所はまだよいとして三か所は限度である、といった内容のものであったらしい（「高田分校三十年史」、一九八一）。この「助言」をめぐって「学閥感情」がどのように「露呈」したのかは、各「学閥」の「歴史と伝統」からおよその察しがつく。このようなこともあって「ときわ会」と「公孫会」の代表者が**あい計って**、ＧＨＱと接触して「懇談会」を持ち、「学閥」の「独善閉鎖性打破」と「実施案」を売り込んだ。たとえば「ときわ会」にあっては他大学出身者も入会させることと「教育団体」と偽装することによって利権集団としての本質を隠し、ＧＨＱによる解散命令を回避した。**「学閥」の生き残りのためにはそれま**

で抗争をくり返してきた「ときわ会」と「公孫会」とが共同歩調をとってGHQにとり入ったのである。しかし、このことは新潟県教育界における「学閥」支配の継続にとどまらず、師範学校出身者以外にも「学閥」の支配・統制を拡大することになり、その後の新潟県教育界にとっては極めて不幸なこととなった。

一方、以上の経過はGHQの側からみれば「学閥」に「貸し」を作り、民主的教員組合運動や教員に対する弾圧をはじめ、GHQの反動的政策の遂行に「学閥」を容易に利用することを可能にした。一九四九（昭和二四）年五月には新潟大学が発足し、一九五一（昭和二六）年三月には最初の修了生を出すとともに、旧師範学校、青年師範学校は廃校となった。

一九四九（昭和二四）年度はGHQの指令によって県教委が年度当初から「教育の政治的中立の決議」をし、民主的教員に対する弾圧にのり出した。九月七日には軍政部の立合の下に、文部省第二会議室で開かれた全国教育長会議において「九月三〇日までに各県教委の責任において、文部省との連絡の上でレッドパージを行なうこと。」という指示が出された。GHQ民間情報局顧問イールズの新潟大学開学式における反共演説（一九四九年七月一九日）もこれに呼号するものであった。新潟県ではまず一〇月四日に新潟大学の六名の教員と一名の職員に対し、「辞職勧告」が出されたが、新潟大学職員組合はこれとたたかった。一二月に入って八名の小中学校教員（福井つるよ（岩船・村上中教諭）、米倉芳雄（北蒲・安田中学校長・新教組北蒲支部長・中学校部長）、佐藤正（同・中浦中学校教諭）、酒井信子（同・笹岡中学校教諭）、佐藤勲（同・赤坂小学校助教諭）、南雲源兵衛（南魚・五十沢中学校教諭）、長谷川正巳（同・六日町小学校教諭）、藤田正（南蒲・今町中学校教諭））にも「辞職勧告」が出された。（新潟県教職員組合史第一巻、一九五八年、新潟県教職員組合）。

これは言論・マスコミ界における弾圧とも呼応した朝鮮戦争への「地ならし」であり、また日本を「極東の反共のトリデ」にしようとするアメリカの戦略にそったものであった。新教組は不当馘首撤回を要求してたたかった。法廷闘争では一九五〇年九月に第一回公判が開かれたが、既に六月には朝鮮戦争が開始されていた。

新制中学校の発足と新陽会の形成

さて一九四七（昭二二）年四月には新制中学校が発足した。しかし校舎はもとより、机・いすに至るまで設備が整わず、当初は小学校などに併設されることも多かった。授業もしばしば複式でやりくりされた。

俗に「新制」とよばれたこれらの中学校はまた教員を確

保するのが大変であった。最初の年はその四分の三は学制改革によって職場のなくなった国民学校高等科および青年学校からの転入であった（第1表a）。しかしそれだけでは教員が不足した。校長は教員の確保に奔走した。南蒲・大面（おおも）中学校の小野校長は「教員組織で私も苦労しました。高専出とか大学出とか雑多な学歴の人達を、土地柄に合う教員に仕立て上げることで、日時がかかりました。また、引揚げ者で『満州国』の高官だった人が教員になってきたが、子供とのギャップがありすぎて駄目であった。工場長をした人がきたが、自動車を一台買ってくれればとかで焦点が合わなくて困った。」と述懐し、また中頸・新道中学校清水享作校長は「当初の中学校の教員組織は天下一におもしろい組織と思った。私は長く小学校にいたのですが、小学校教員は型にはまった者ばかりで、私はどうもあきたりなかった。しかし、師範出は指導面に優れているが、学力の点が欠ける。高専出は指導面に欠けるところがあるが、大らかで創造性とか研究面に長所がある。校長としてはあくまでこれをまとめて行くべきだ。」と当時の教員の特徴をのべている（「新潟県教育百年史昭和後期編、一九七六年、新潟県教育委員会）。

さて当時の新制中学校教員の免許状による資格状況は第1表bのように師範学校卒の「本訓」免許保持者が四三％で最も多く、「中免」と「実免」をあわせての中教免保持

前歴	1947年	1951年
国民学校小学校	61.0%	40.0%
青年学校	13.5%	11.3%
中等学校	7.2%	6.6%
新制高校	——	
実業界その他	9.3%	15.0%
新卒者		
師範新卒	0.2%	10.6%
大学新卒	5.7%	12.0%
高校新卒	0.1%	3.8%
計	3406人	5184人

a．中学校教員はどこからきたか

旧免	(1949年5月)
初准	0.1%
本准	0.1%
専訓	4.5%
初訓	3.0%
本訓	43.0%
実免	1.0%
中免	11.0%
高免	0.3%
養訓	0.3%
無免許状	36.7%

b．中学校教員の免許資格状況

学歴	(1949年5月)
高等小学校	1.9%
乙実	0.8%
青年学校	
旧制中学（4年）	4.4%
〃（5年）	10.1%
新制高校	0.9%
専門学校（1年）	
〃（2年）	40.2%
〃（3年）	36.7%
〃（4年）	1.6%
私立大学	2.7%
官立大学	0.6%

c．学歴別状況

第1表　新制中学校発足当初の教員構成（「新潟県教育百年史」昭和後期編，1976）。

者は一二％である。なお、無免許は三七％であるが、教育職員免許法の施行は一九四九年（昭和二四）年九月一日である。しかし新制中学校の教員構成は新制大学の発足（一九四九年）とともに師範学校出身者は減少し、中学校免許状をもった新制大学出身者が増加するようになった。

このような新制中学校の管理職ポストは生き残り作戦に「成功」し、利権の拡大をねらう「公孫会」や「ときわ会」の新しい「草刈り場」となった。しかし旧制専門学校や大学、高等師範学校などの出身者は中学校教員としては師範学校出身者よりも先輩格であり、「師範閥」の影響の及ばないところで校長などとなっていた。これらの人々は「中教免」グループとよばれ、「秋葉会」という親睦団体をつくっていた。また新田発市にあった新潟県立青年学校教員養成所および青年師範出身者は独自に「青葛会」を形成していた。しかし事態はさらに複雑であった。最終学歴が高等師範や文理科大学などの大学であっても、その前に新潟師範や高田師範を卒業している場合がある。このようなことも手がかりにして「師範閥」は管理職ポストの拡大をうかがった。たとえば新潟市二葉中学校はもともと「無色透明」の校長ポストであったが、一九六〇（昭三五）年に高田師範－東京高師卒の遠山光雄校長が赴任した。すると「ときわ会」側から「純粋の秋葉ポストを公孫がとった」と「不満」が出され、一九六五年三月にその校長が寄居中学校に転じると「ときわ秋葉」といわれる新潟師範－文部省検定の伊藤他家治校長が山の下中学から転任した（「新潟日報」一九六五年五月二八日付、「師範閥－あすの教育界のために考える(7)」。このような「師範閥」の態度への警戒と、それに新制大学出身者がそれなりの年令に達したこともあって、このような「中教免」グループは一九六七（昭四二）年に「新陽会」として「派閥」としての組織をととのえ、利権派閥化した。なお「秋葉会」は現在では「新陽会」の退職校長の集まりとなっている。このような経過から「新陽会」は新潟大学教育学部以外の出身者で構成されており、「高陽会」（上越）、「柏葉会」（中越）、「さつき会」（新津・五泉・白根）、「西陵会」（西蒲）、「新秋会」（新潟市）、「阿賀喜多会」（阿賀北）、「柏会」（佐渡）の地域組織をもっている。

「学閥」に対する新教組のたたかいと「学閥」の策動

戦後、県内の教員による自覚的組合結成の動きが「国教組」に典型的にみられるように、「全県的組織一本化」の美名のもとに、「学閥」によって機先を制して組織されたことは前回のべたとおりである。しかし、いくつかの地域では、下からの運動のもり上がりによって、しっかりとした活動力をもった組合も結成されていた。水原町の教員を

中心とする「北蒲原郡南部郷教員組合」（北蒲南教）の結成は一九四六年四月で、執行委員長は椎谷順作（新潟師範卒）であった。北蒲南教は国民学校と青年学校の区別をせず、小林勗も安田国民学校教頭として、あるいは県視学として熱心に激励していた。新潟市中等学校教員組合も新潟中学（現新潟高校）の歌川京造、蕗谷武司らのよびかけによって一九四六年三月に新潟高女（現新潟中央高校）で結成宣言を行ない、男女教員の差別反対、封建的学閥の打破、官僚的人事行政の民主化などを訴え、また、いわしの配給なども行なった。戦後の新潟県教育界の民主化のためには、「学閥」問題はどうしてもさけて通れない問題であり、今でもそうである。

一九四八（昭和二三）年一〇月二三日、新発田市で開かれた新教組第五回県委員会に青年部から次のような「組合民主化促進に関する件」が提案された。時あたかも「学閥」のボスが「組合推薦候補」として県教育委員に当選した直後であり、新教組自身についても「学閥」との関係が改めて問われていた。

「組合の民主化は個々の組合員が教育労働者精神に徹することに依って達成されることを確認し、現段階として左の方針の実現に邁進する。

（一）封建的学閥を徹底的に打破すること。

（二）組合の正副執行委員長・書記長・中央執行委員の最終的決定は、民主的方法によること。

右二項に関し、（A）執行部は次期委員会までにこの原案を立案し提出すること。（B）青年部及び各支部は次期委員会までに本題を十分研究すること。

（三）校長公選」

この青年部提案は多少の論戦はあったが異議なく可決された。そしてこれらを受けて翌月の一一月一三・一四日に柏崎市で開かれた第六回臨時県委員会では執行部から先の提案を具体化した「封建的学閥打破に関する件」が提案された。この提案は前文で「学閥」が県教育界に害毒を流していることや、そのためには平常から学閥が蠢動する余地のないようにし、純正な組合運動を推進する必要があることをのべたあと、その具体的な第一次対策として次の四項目が提案された。

一、組合員の意見調査

二、教育人事の民主化

三、同窓会及び其の他これに類似する団体の民主化

四、第一項の調査の結果による第二次対策の具体的立案

しかし、前回、簡単に可決されたこの案件が、今回は刈羽や古志などから反対意見が出て、荒れた上で可決された。これを受けて執行部は組合員に学閥に関する無記名アンケートを行ったが返事は一通もこなかった。一九四八（昭和二三）年の年度末の人事異動期になると「学閥」人事はま

た問題となった。

しかし、以上の組合の決議は一九四九（昭和二四）年度の執行部（山名正二書記長）にも引き継がれた。新教組一九四九年度第五回県大会（一九五〇年二月）で執行部は一般情勢報告の中で学閥の情勢を次のように報告した。時まさに朝鮮戦争開始の前夜であり、民主的教員に対する「辞職勧告」が既に出されていた。報告は「（前略）学閥としての行動を組合の行動であるかの如く擬装し、たくみに教員及び世人の眼をくらまして来たが、学年末人事異動の如き際にはその存在が明確に見受けられた。しかしながら組合の闘争が進展し、しかも組合が決然として学閥打倒の旗幟を鮮明にするや、彼等は学閥行動と組合行動とをマッチさせることができず、ここに学閥連合の体勢をととのえ、次第に反組合的行動をとるに至った。更に時あたかも組合に対する諸々の弾圧の大涛が押寄せ、教員に対する不当クビキリの旋風が襲来し、組合員がこれに対して萎縮の傾向を示すや好機至れりとして組合員を恫喝し、懐柔し、ギマンして、組合を彼等の御用機関とする策動をなすに至った。」と「学閥」を糾弾した（「新潟県教職員組合史」第一巻、一九五八年、新潟県教職員組合）。「学閥」は民主的組合の切りくずしと変質の策動をはじめたのであった。当時の青年部長中村栄三は後に新潟市教組執行委員長となったが、その三十周年記念集会（一九七七年十一月）で「組合結成以来ひとすじにたたかいつづけ汚れなき闘争の歴史をふりかえり、すがすがしい想いがする。わが人生に悔あらじ。」とあいさつしている（「新潟市教職員労働運動史（新潟市教職員組合三十年史）」、一九七八年、新潟市教職員組合）。

組合役員の引きおろしに「学閥」の使者が組合事務所へ
――「学閥」連合による組合「乗っ取り」事件――

「学閥」はGHQにとり入り、庇護されて、新制大学出身者も巻き込んだ利権集団として衣替えをすることによって戦前からの利権を継承しつつ、新たな管理・統制の機能を拡大しはじめていた。たとえば「新潟師範学校同窓会」は一九四九（昭和二四）年五月に「ときわ会」となっていた。したがって、戦後当初、「学閥」の統制がそれなりに及んでいた新潟県の教員組合運動が、この頃になってまともな運動として発展しつつあったことは、「学閥」の県教育界支配にとって「不都合」なことであった。とくに教員組合運動のなかで、「学閥」の利権支配の実態とその本質が明らかにされていくことは「学閥」支配の足もとを掘りくずすものとして、最も恐れる点であった。

さて一九五〇（昭和二五）年度の新教組執行部の役員選挙は一九五〇年一月二二日（日）に行われることになり、各ポストとも複数の立候補があった。ところがなぜか投票

日の三日前になって執行委員長候補三名のうち二名が立候補を辞退した。そして二日前の一月二〇日（金）の夜、「新潟師範同窓会の代表」と称するTという男が突然新教組の組合事務所に特定候補の立候補辞退の強要にあらわれた。「自分は新潟の同窓会の代表として来た。高田の方とも話して決めたことだがSやIにさがってもらいたい、と思って来た。」ということで、S氏（副委員長候補）は別室に連れていかれ、立候補辞退を余儀なくされた。「学閥」連合による組合役員候補者おろしが、投票日の二日前になって、事もあろうに組合事務室で行なわれたことに、居あわせた執行委員は怒りで胸がふるえた。結局S、Iのほか日教組中央執行委員であった高田師範出身のK氏も日教組本部で辞退を強要され、立候補を辞退した。これは「教育団体」を偽装する「学閥」の仮面のはがれた重大なできごとであった。二一日午後十時にはただ一人の執行委員長候補となった桜井奎夫氏も辞退した。このような「学閥」の露骨で無法な組合選挙干渉に抗議して旧執行部は四役以外の一九五〇年度執行委員に全員が立候補したが既に当選は及ばなかった。一九五〇年度執行委員長には辞退したはずの桜井奎夫氏が選挙委員長により「無投票当選」とされた。「学閥」連合はともかく「学閥」支配の打破をかかげた執行部を強引に引きずりおろした。桜井氏（後に社会党衆院議員）が執行委員長を終えたあとは後述のように「学閥」候補が新教組県本部執行部を占めるようになった。旧執行部は「学閥」の系図、その現在勢力などを詳細に調査して「学閥白書」をつくり得る段階にまで進もうとしていたが、「白書」は遂に完成しなかった。また旧執行部のうち、北蒲・水原中学校から本部執行委員になった二名は職場復帰を妨害されたが半年にわたるたたかいの後、解決をみた。

講師裁判――青年女性講師の教員採用差別に対するたたかい――

戦後当初はむしろ教員が不足し、教員志望者のいわゆる「就職問題」は生じなかった。しかし一九五四（昭二九）年ごろになると新卒者の需要数は低下しはじめた。新潟県教育委員会では一九五六年（昭三一）年度から「公立学校教員採用適性検査」を行なうこととなった。この背景には一九五六年五月の「県財政再建計画」によって、職員の定数減、人員整理が行なわれつつあったことも関係している。「検査」の結果はABCDの四段階に評定され、A級から順次採用されることとなった。

丸山博子先生は一九六二（昭三七）年三月、新潟大学教育学部を卒業した。学生時代には教育学を専攻し、子どもたちの真の幸福とは何かを理解し、そのための実力を子どもたち一人一人につけてやれる教師をめざして学習し、そ

のためのゼミナール活動にも参加した。また当時、老朽化していた新潟（旭町）校舎の改築運動にも参加した。その年の教員採用試験の結果はB評定であったが、三月三十一日になっても内定の連絡はこなかった。四月七日になって、やっと連絡がきたがそれは「一年期限付講師」採用ということで、学校は燕西小学校であり、四年生の担任となった。学校ではせい一ぱいの努力をしたが、次年度の教員採用試験の準備もあり、睡眠不足がつづいた。一一月末ごろになると次年度の採用内定のうわさがあちこちで聞えてきたが、彼女には何の音沙汰もなかった。「校長の自宅へ行ってみたら。」といってくれる先生もいたが、そのことが何を意味するかわかっていたので行かなかった。三月二十七日になってまた「講師採用」のハガキが届いたが、学校は子どもとも親しくなり、また地域のようすもわかりかけてきた燕西小ではなく、県内でも有数の豪雪地、北魚・入広瀬村の横根小学校で、一・二年生の複式学級の担当となった。横根小学校でも毎年採用試験をうけたが三年間、「講師」のまま据え置かれた。その間、夫は燕市、生まれた子供は笹神村の実家に、と家族三ケ所の別居生活を強いられた。学芸会の準備などで、夜一〇時半頃まで学校で仕事をし、二時間ほどの間に一メートル近くも積もってしまった雪の中を泳ぎながら帰って来る時など「いつか教諭になれるんだ。間もなく教諭になれるんだ。教師としての実力をつけておこう。」と自分自身に語りきかせ、はげまして苦しい時をがんばった。しかしその年の教員採用試験の結果はC評定であった。村長や村教育長も県教委に御百度をふんでくれたというが、その結果は「失職通知」であった。村の人をまじえた送別会では「家庭の御都合でおやめになる。」と紹介された。村人は雪の中を一人づつ背中に荷物をせおって駅まで送ってくれた。その後は家庭教師や食堂の給仕などのアルバイトや、産休代理教員（小学校五回、幼稚園三回、中学校一回）をして生計をささえた。ある年の暮れ、大学時代の同級生から「……ボーナスが出ました。少しだけど、子供達にあたたかいものでも買って下さい。……」と現金書留で一万円が送られてきた。その友人のはげましにこたえて、どんなに苦しくても、この不当な「臨時教員」制度をなくさなければならないと自分にいいきかせた。

宮本幸子先生は幼くして両親をなくし、高校に入ったときから経済的に自立することを考えて就職を希望していた。しかし信頼していた高校の先生に「小学校の先生になりなさい。小学校では、自分で研究・創造していく先生がこれからうんと必要なんだ。」と励まされて、新潟大学教育学部に入学した。大学ではクラスゼミを開いて友人と教師論、教育史、現場の先生の教育実践を学びあい、卒論には生活綴方運動をテーマに選んだ。以後、教員採用試験の面接で、何度か卒論についての質問をうけた。卒業（一九

六五年三月）の年度は小学校教員の募集人員六〇〇人に対し、受験者は二四五人で募集人員の半分にも満たなかった。採用試験をうけないで教員になった人が三六六名もいた。しかし結果はB評定であった。十二月末になっても教育学部全体で五〇名以上に内定がこなかった。教育学部自治会は「完全就職実行委員会」をつくり、全卒業生の正式採用を要求し、署名運動や教育庁交渉を行なった。その成果もあってか、二月の中旬ごろまでにはほとんどに内定通知が来た。しかし宮本さんなど何人かには内定がこなかった。そんなある日、宮本さんなど八名が大学の就職担当の教員に呼び出され、その案内で三回に分けて県教委の「特別面接」をうけさせられることになった。県教委での「面接者」は宮下美弘管理主事（後のときわ会会長）をはじめ六名位で、「自治会では何の役をしていたか。」とか「勤務評定、学力テスト、君が代、国旗についてどう思うか。」などの質問をうけた。結果は岩船・山北町桑川小学校の「講師採用」であった。この年の講師採用者は七名で、全員が「特別面接」受験者で、全員自治会執行委員およびサークル活動経験者であった。大学から県教委への宮本さんの「人物調査表」は白紙のまま提出されていた。翌年は三条市大島小学校、その翌年は燕西小学校、そしてその翌年はついに失職させられた。

中村加代子先生は一九六八（昭四三）年に新潟大学教育学部を卒業した。学生時代には北信越大会で二位になるなど卓球選手としても活躍した。また各クラスをもり上げて、何年ぶりかで大学祭を盛大で有意義なものにするためがんばった。また自治会執行委員として、完全就職運動などにとりくむとともに、未来の理科教師をめざしてゼミナール活動にもとりくんだ。

採用試験の結果はB評定で南魚・大和中学校の講師採用であった。しかし講師採用にすらならず、卒業式の「謝恩会」に出てこない仲間もいた。学校ではこの現場こそ学生時代、理論を学び、実践を夢みた場であると思い、一時間一時間の授業に力を入れて打ちこんだ。また気象クラブ、卓球クラブの顧問としてのクラブ活動の指導にもあたり、また大学時代に専攻した生物学を生かして指導した自由研究、「大和町の土と植物」は県の科学研究会で優秀賞に選ばれた。その年の教員採用試験の結果はやはりB評定であったが翌年も大和中学校で講師として残れることになった。しかしその翌年は失職させられた。

このような県教委とそれを内側であやつっている「学閥」による教員採用差別は三人の先生だけの問題ではなく、教員をめざす学生を萎縮させ、「ものいわぬ」教師像を学生のうちから強いるものであった。また期限付講師の生活条件、教育条件がいかにきびしく、また不安定なものかは前述にもその一部を紹介したように原告側が新潟地方裁判所

に提出した準備書面（一九七一年九月九日）にリアルにのべられている。またその中で「このような教員の採用をめぐる県教育委員会と大学の一体となった思想差別は、本来自由なふん囲気のもとで勉学にいそしむべき学生の中に、沈滞した気風を醸成し、大学の教育学部をして教員の予備校化たらしめ、権力にとり入る無気力な教員を産出させることにある。」とのべて採用差別の本質を告発している。一九六九年（昭四四）年九月二二日、三人の先生はこのような不当な教員採用差別の撤回をめざして裁判闘争（「公立小中学校教諭たる地位確認請求事件」）を開始した。その年の十月二日には新潟県議会総務文教委員会に小委員会が設けられ、三月議会（三月十七日）では①今後、県教委は講師・助教諭としての新規採用は抑制する。②現任者は継続雇用し、正規任用の道を開く。③思想上の問題で差別をしない、ということを県教委に強く要望することになった。裁判では被告（燕市、入広瀬村、大和町）が適当でないという理由で一たん却下となったが東京高裁に控訴し、地裁差戻しの判決（一九七〇年一一月二七日）が出された。一九七四年十一月十二日には宮下美弘元県教委管理主事を証人として公判が開かれることになった。しかし教員採用のしくみや差別の実態が明らかになることを恐れた県教委は急に和解を申し入れてきた。丸山博子先生は燕東小学校に、宮本幸子先生は味方小学校に、中村加代子先生は長岡東中学校に一九七五年四月一日付で教諭として復職した。裁判闘争がはじめられてから五年以上がたっていたが、「新潟県講師、助教諭の不当差別の撤回をめざす公判闘争を励ます会」に結集した教員組合などの暖かい、そしてねばり強い支援のもとでの勝利であった。その後、宮本先生は「毎日毎日が楽しくて、知らないうちにニコニコしてしまうのョ。いい先生になることがみんなへの恩がえしと思って必死でやっているんョ」と語っている（「講師裁判和解勝利」（新潟市教職員労働運動史、一九七八年）。

新教組県本部人事は「公孫会」と「ときわ会」が統制
――「派閥」のボスと組合役員の「打合せ会」も――

新教組県本部執行部が前述のような過程で「派閥連合」の不法な役員選挙干渉によって屈服させられた後は、いわゆる組合「主流派」の人事は派閥の統制下にある。県本部四役の所属派閥の実態を第2表に示すが、これらは派閥のうちでも「公孫会」と「ときわ会」の二大派閥によって独占されており、あらかじめ調整されている。委員長と書記長は「公孫会」と「ときわ会」の輪番制であり、四役を原則として公孫会二、ときわ会二で配分している。各支部の役員選挙においても、二、三の支部をのぞいてはほぼ同様で「主流派」にあっては「派閥」のボスから電話で立候補

	執行委員長	副委員長	書記長	書記次長
1987（昭62）年度	公孫会（K）	ときわ会（K）	公孫会（W）	ときわ会（N）
1986（昭61）〃	公孫会	公孫会（M）	ときわ会（S）	ときわ会
1985（昭60）〃	ときわ会（I）	公孫会（K）	ときわ会	ときわ会（W）
1984（昭59）〃	ときわ会	公孫会	公孫会（K）	ときわ会
1983（昭58）〃	公孫会（I）	ときわ会（H）	公孫会	ときわ会
1982（昭57）〃	公孫会	ときわ会	ときわ会（T）	公孫会（Y）
1981（昭56）〃	公孫会	ときわ会	ときわ会	公孫会
1980（昭55）〃	ときわ会（M）	ときわ会	公孫会（T）	公孫会
1979（昭54）〃	ときわ会	ときわ会	公孫会	公孫会（O）
1978（昭53）〃	公孫会（K）	ときわ会（S）	ときわ会（Y）	公孫会

（カッコ内は該当者のイニシアルを、矢印は同一人を示す。）

第2表　新教組県本部四役の「主流派」による派閥支配の実態

を促されることもある。組合役員選挙は管理職ポストの配分とともに派閥間調整が必要であり、また「反主流派」の進出を阻止するために派閥連合による謀略組織「同志会」が選挙の都度、暗躍する。また投票の秘密が守られない状態で投票を強いられることもある。以上のようなしくみのため、組合「主流派」の運動にあっては、新潟県教育界の民主化のための最重要な課題の一つである「学閥」問題については口をつぐんでおり、したがってそれと密接に関連した管理強化・労働強化についてはまともにたたかいえないでいる。そのかわり、「主流派」組合役員の経験は「閥内競争」における「業績」としてとり扱われ、とくにボスのいうことをよく聞いて組合運動をすると意外と早く管理職にも登用される。

このような「派閥」のボスと「主流派」組合役員とはしばしば席を同じくして秘密裡に会談している。ときわ会では毎年、年度末に「ときわ会本部役員とときわ会出身の組合・学協等役員・代表等との懇談会」なるものが、西蒲、三南、岩船などの支部のもちまわりで設定され、温泉旅館などに一泊したりして行なわれている。出席者はときわ会本部から正副会長、幹事長、「各界対策委員」などのほかに組合交渉の当事者である県教育庁関係者も出席しており、組合からは本部・支部の「ときわ会出身」役員が出席している。ときわ会の各支部にはこの会のために「激励金」

の供出が指示される。これでは「学閥」問題どころか、組合員の切実な人事異動や校内のさまざまな問題に対してたたかいえないのも無理からぬことであり、まじめな組合員を愚ろうするものでさえある。

このような新教組執行部は日教組田中一郎委員長の「西岡武夫（現自民党衆議院議員）氏を叱る会（激励会）」出席問題についても、田中委員長を擁護する立場をとっている。一九八六（昭六一）年八月二九日の第百十六回日教組臨時中央委員会では、同じく「学閥」の統制下にある愛知県教組など十二県教組とともに退場、流会戦術をとり、日教組の民主的運営の破壊に加担した。またこのような策動の中心の一人である田代宏日教組情宣部長（「日教組があぶない」、一九八六年、教育史料出版会）も「ときわ会」であり、「新潟の学閥」は全国的にも日教組の民主的運営と活動の前進を妨げている。

「新潟大学教育学部同窓会」も「ときわ会」の「閥中閥」に——片や「高分協」は「公孫会青年部」に——

さて、新制大学の発足にともなって旧制の師範学校は廃止され、新たに新潟大学教育学部（新潟）、および新発田分校、長岡分校、高田分校として四地区に分かれて出発することになった。これらの制度改革は旧師範学校同窓会（「師範閥」）の利権支配を弱めていく一つの条件であるようにも思われた。実際、これらの新制新潟大学教育学部の卒業生のなかでは旧師範閥を継承・拡大した「学閥」の県教育支配をよしとせず、出身分校にとらわれない「統一同窓会」結成の動きが最初の修了生が出た一九五一年七月ごろよりあった。しかしそれが「特定の地域の陰謀」であるとか「一部の者の行動」とかにねじまげる「学閥」筋からの中傷と牽制もあって思うようには進展しなかった。ようやく一九五六（昭三一）年十一月になって「新潟大学教育学部同窓会」が発足し、初代会長には江口健一巻高校教諭（現白新中学校長）が選ばれた。ところが翌月になると、高田分校の修了生や卒業生によって高田分校連絡協議会（高分協）が「同窓会」に対抗して旗上げした。初代会長は武田忠雄、副会長は堺嘉治、木元雅一であった。「教育学部同窓会」と「高分協」とは翌年、柏崎市で「学部同窓会」一本化について話し合いの場をもったが「高分協」側が賛成せず不調に終った。

さて、新制大学の発足に際して「高田師範学校同窓会」は「新潟師範学校同窓会」とは異なり、ただちに他大学出身者も加入させるという方針はとらず、「公孫同窓会」として高田分校修卒者のみに対象を限っていた。このことは強烈な地域セクショナリズムと「同窓」という点での共同体意識をあおってきた「伝統」をただちに変更できなかっ

たジレンマがあったものと考えられる。「公孫会」が「ときわ会」と異なり、女性教員も加入させているのは、男女共学となった高田分校修卒生をまるごと「公孫同窓会」の対象にしてきた以上のような事情による。このような状況のもとで高分協は「公孫会全員加入」を基本方針とし、一九六六年には卒業年次を基礎とする「科年次連絡会」に改組され、一九七二年には「公孫会青年部」となった。しかし一方では一九六五（昭四〇）年ごろから他大学出身者もなしくずし的に加入させるようになり、一九七三（昭四八）年にはその名も「公孫同窓会」から「公孫会」に改めた。

一方、「教育学部同窓会」は当初は「学閥」の利権支配に組しない理想をかかげて発足したが、当初の卒業生幹部が目前に管理職ポストがちらつくようになると「ときわ会」の持ち分の管理職ポストの分け前にあずかろうとして幹部の大部分は変節した。そして一九六九（昭和四四）年一二月には「ときわ会」、「公孫会」、「新陽会」、「検友会」、「青菖会」、「女教員会」とともに「派閥連合」に加わり、「七者の会」が発足した。新制一期の卒業生が四十才近くになった頃である。現在、同窓会幹部は県教委下越教育事務所長や管理主事なども経験し、「ときわ会」幹部として派閥の利権支配に組し、それに重ねて「同窓会」幹部として、「ときわ会」内部での新潟大学教育学部出身者の領袖となり、「同窓会」を「ときわ会」の「閥中閥」に変質させる役割を果してきた。また「ときわ会」かつ「同窓会」に属する校長が、その地域でいかに多くの「同窓会費」を集めるかが「ときわ会」内部での一つの「業績づくり」にされている例もある。さらに、最近では「女教員会」幹部（女性校長）を同窓会副会長に加えるなど「派閥連合」のもとに新潟大学教育学部卒業生を「管理」しようとする新しい動きも認められ、「公孫会」にもエールが送りはじめられている。当初の理想にもえていた「教育学部同窓会」二代目会長の本間英輔氏（木戸中学校教諭）は同窓会機関紙「教育新報」（№八三、一九八五）でこの変節を「同窓会が創立して三十年。この間、幾多の人々によって炬火が燃やされ続けてきた。十周年、二十周年という節には記念事業が催され、また「教育新報」も号数を重ねてきている。母校も五十嵐浜キャンパスに新潟・高田・長岡の三分校の統合や大学院の設置等、制度上の充実を果たしている。しかし、これらの業績をいかに列挙しても同窓会発足の当初の理想が達成されていなければその評価は低いものにならざるを得ない。思うに、同窓会の理想は風化され、多くの同窓生は学閥の朱に染ってしまった。」とのべている。

新潟大学教育学部の統合・上越教育大学の開設と「学閥」の介入

新潟大学ではかねてから県内各地に分散していた各学部・分校を新潟市五十嵐地区に統合することを計画していた。しかし、その中で、教育学部高田分校にかかわる問題が最も難題であった。上越地区では「公孫会」中心に統合反対運動を展開した。その過程で塚田十一郎知事（「二十万円中元事件」で一九六六年三月辞任）、亘四郎知事それに稲葉修、田中角栄（ロッキード汚職で有罪判決）、内藤誉三郎などの自民党国会議員が大学の自治の枠外で関与した。また「ときわ会」や「新潟大学教育学部同窓会」、「教育学部（父兄）後援会」は「統合促進」を運動した。一九六五（昭四〇）年六月一七日の新潟大学第一四〇回評議会では統合整備計画委員会の答申にもとずき、まず教養部を建設し、これにともなう共通施設、福利補導施設、屋内体育施設を同時に設けることを決定し、昭和四一年度の概算要求に計上した。しかしこの頃から教育学部高田分校を四年制の義務教育教員養成大学にしようとする高田市ならびに旧高田師範学校同窓会（「公孫会」）の動きが一層活発になり、統合移転の最初の要件たる教養部建設予算の阻止をはかるため、地区選出の代議士や塚田知事を介して国に反対陳情を行なった（「教養部予算計上阻止運動」）。その結果、昭和四一年度概算要求中の教養部新設費一二億円は全額削除された（「新潟大学二五年史総編第二節「統合計画の具体化の着手とこれを阻む外部圧力への対応」、一九七四年、新潟大学二五年史編集委員会）。このあと一九六五年九月二二日に来学した稲葉修によって、高田分校・長岡分校の新潟市への統合とそのあと高田市に学芸大学を設置する案（いわゆる「稲葉私案」）が示された。一〇月一日の教育学部教授会でこの案についての表決を行なったところ反対一七、賛成一一、保留一で、附帯事項として他の形態の設置を要望することに賛成二〇であった。さて、昭和四一年度概算要求のうち、教養部土地購入費初年度分一億円がその後復活した。田中角栄自民党幹事長はこの予算をつけるにあたり新潟、長岡、高田の三市長を招き、高田には高校教員養成大学を設置する案を示した（いわゆる「田中私案」）。高田市議会では「田中私案」は「稲葉私案」から一歩後退したものであるとの不満が多く、あくまで小・中教員養成のための大学を設けるよう、文部省、自民党文教議員に対して強力に働きかけることになった（同上書）。一九七〇年ごろから自民党内では西岡武夫文部政務次官などから教員の管理統制と格差分断をねらいとした教員養成の新構想単科大学設置の意向が示され、自民党文教制度調査会の「教員養成等に関する小委員会」（委員長内藤誉三郎）が本格的な検討をはじめていた。一九七二（昭四七）年、稲葉修は文部大臣となり、中教審路線にもとづいた「新構想教員養成大学」の実現に着手しはじめた。「公孫会」はこの間、上越市ＰＴＡ連合会まで動員して「政治工作」を行なった。

以上のような過程での「学閥」の関与と、裏面での「政治工作」にふれて上越地区（新潟四区）選出の木島喜兵衛社会党衆院議員は「教員養成大学に反対する」というインタビューの中で、次のようにのべている（「自治と住民運動」No.3、一九七二年、新潟県自治研究センター）。

――しかし、困ったことに、この教員養成大学の問題に学閥がからみついている。この現実を見きわめて、どう対処するか、とことん考えてみる必要がありますね。

木島　そうです。私は高田師範の卒業で、かって公孫会のボスのところに行って、私が選挙に出るのについて、公孫会で推せんしないでほしい、という申し入れをしたことがありました。同窓会なんてものは親ぼく団体なんですから、選挙や政治に介入することが、そもそも筋ちがいなわけです。

しかし現実は、それ以上のものに化けてしまっている。歴史のなかで根づいてしまっています。学閥間のふり合いとか調整とかの含みが、どうしても教委による教員の人事異動にでてきている現実を、否定することはできますまい。県教組の執行部の人事にまで影響するとなると、まさに不当労働行為です。

事が人事に関しているので、これを改めれば、学閥の根を切ることができるのですが、それには過渡的手段としてなんか、実質的な手だてをつくる必要があるのでしょう。どういう手だてなのか、いまのところ、私もこれといった案をもちあわせておりませんが……。

学閥の弊害をなくしていく教組のたたかいが、進んでくれば、なんとか新しい局面をきり開いていけるのじゃないか、と思います。

――ところで、あの結成大会（「教員養成大学設置期成同盟会」）であなたも、あいさつされたわけですが、へんなぐあいじゃなかったですか。

木島　いや、そうでもありません。わずか五分間では、じゅうぶんなことはいえませんしね。

宙に浮く公孫会員の涙の献金・一億円
――「公孫会」と「ときわ会」のそれぞれの「記念事業」――

一九八一（昭和五六）年四月には長年の難題であった新潟大学教育学部の新潟市への統合移転が実現し、また上越市には上越教育大学が開設された。このような統合の記念事業としては「学閥」解消が最もふさわしいものであったが事態は正反対であった。「公孫会」と「ときわ会」はそれぞれ上越教育大学と新潟大学教育学部への影響力を強化するための「記念事業」を計画した。公孫会は目標額一億五千万円の募金運動を展開し、「財団法人春日山教育会」

を設立して上越教育大学内の食堂、売店事業のほか、同大学の運営に関する協力助成などを計画した。「高田分校主事住宅の新築寄付」をはじめ公孫会の物金両面による寄付行為によって新潟大学教育学部高田分校の自治が著しくむしばまれていたことは歴史の教訓である。「春日山教育会」にはさすがに文部省から〝待った〟がかかった。また寄付は公孫会員一人あたり五万円から九万円程度が「割り当て」られたが、「人事で脅かされているようで寄付を断りきれない。」という声も切実であった（「揺れる学閥」、新潟日報、一九八〇年八月六日付）。公孫会は結局、一億百万円の「寄付」を集めたが、「春日山教育会」が挫折したあと、一九八一年には「附属小学校の記念講堂を改築して上越教育大へ寄付し、公孫会としても利用させてもらう。」という案に変更した。しかしこの案も一九八三年に上越教育大に再び断わられた。一億円以上もの「涙の献金」が、一〇年近くたった今も、安田信託銀行の貸付信託・金銭信託と化して宙に浮いている。この「資金」は当初の「寄付の趣旨」をはずれて、「ときわ会」が「新潟教育会館」を設立したことにならって、「公孫会館設立問題」にすりかえられ、「公孫会」幹部は今もって「軽々しく結論を出すことは慎まなければならない。」などとのべてその責任を回避している（「公孫会報」七八号、一九八四年）。また公孫会は「公孫会青年部と上越教育大生との交流会」などを行ない、学生のうちから「派閥」の影響力を行使しようとしている。

一方、「ときわ会」は統合した教育学部に「良寛像」を「寄贈」した。「寄贈」者は「教育学部同窓会」、「教育学部後援会」、それに旧旭町校舎の「改築期成同盟」の三者であったが、いずれも「ときわ会」の別動隊である。「記念事業実行委員会」の趣意書には「児童・生徒たちに慕われ、その父母や地域の人びとにも尊敬される―往年の良寛さんさながら―人材が、この大学の門から輩出して教壇に立つとしたら、それこそ、新潟県否日本国の慶福これに過ぎるものはないであろう…。」とある。「良寛像」は総額二千万円に達するものとみられるが、「教育学部後援会」によって学生の父母までその資金を負担（約三〇〇万円）させられた。当初、教育学部の正面に建てられようとしたが、結局、校舎の裏側の風通しのよいところに建てられた。

一九八四（昭五九）年には新潟大学教育学部に大学院が設置された。「現職教員の再教育」を狙いとした上越教育大学の大学院を「意識」した「ときわ会」はそのために「教育学部同窓会」や「教育学部後援会」を動かした。一九八二年の「統合祝賀会」で、関本慎吾ときわ会会長は「何としても大学院を設置してほしい。犬猫科ですら大学院があるというのに。」と発言し（「新潟大学教育学部卒業生名簿」、一九八六年、新潟大学教育学部同窓会）、その見識の

程度を披露した。

新潟県教員採用試験問題出題者が「講師」の「教採研修会」と「派閥連合」による不明朗な教員採用

一九八四（昭和五九）年四月に、新潟大学教育学部内において、新潟県教員採用試験受験希望の四年生を集めて「教採研修会」なるものが実施され始めた。「主催」は、「新潟大学教育学部後援会」（会長倉田信男木戸中学校長・ときわ会）でそれが「教育学部同窓会」に「依頼」して「講師」を「選定」してもらい、採用試験の傾向や受験の心がまえを各教科ごとに詳しく講義するという内容のものである。計画では七月まで十七名の講師によって毎週土曜日の午後行なわれることになっており、「講師」には父母の「後援会費」から総額八十万円の「謝礼」が計上されていた。「講師」の「前歴」と所属派閥の一覧を第3表に示すが、管理主事や指導主事など県教委関係経歴者が十一名にものぼり、実際、新潟県教員採用試験問題出題経験者が含まれている。これは著しい社会的不正行為である。また「講師」の大部分は「ときわ会」であり、「同窓会」の会長、副会長、事務局長が含まれている。

さて第一回は一九八四年四月二八日に教育学部大講議室で行なわれた。そこで示された小論文例題の最初は、

担当	前歴	当時職（1984年）	1986年職	同窓会役職（当時）	派閥
面接のうけ方と演習	下越教育事務所学校指導課長	中学校長	下越教育事務所長	同窓会長	ときわ会
〃	県教育庁義務教育課管理主事	中学校長	中学校長	元同窓会長	ときわ会
小論文の書き方と演習	下越教育事務所指導主事	附属養護小学部主事	県教育庁義務教育課副参事	事務局長	ときわ会
〃	県教育庁社会教育課社教主事	小学校教頭	小学校教頭	副会長，研修部長	ときわ会
国語	附属新潟中学校教諭	中学校教頭	小学校長		ときわ会
社会	附属新潟中学校教諭	中学校教頭	中学校教頭		ときわ会
数学（算数）	県教育庁総務課副参事	中学校教頭	中学校教頭		ときわ会
理科	附属新潟中学校教諭	中学校教諭	中学校教諭	研修部	ときわ会
音楽	附属新潟中学校教諭	小学校教頭	小学校教頭		ときわ会
美術	小学校教頭	小学校長	白根市教委指導主事		ときわ会
図工	下越教育事務所指導主事	中学校長	中学校長		新陽会
技術	下越教育事務所指導主事	中学校長	中学校長	会計監査	ときわ会
家庭（小）	県教育庁義務教育課指導主事	小学校長	（退職）		女教員会（会長）
家庭（中）	県教育庁指導課指導主事	高校講師	高校講師		元ときわ会(退会)
保体（小）	下越教育事務所社教主事	小学校長	小学校長	教育学部後援会前会長	ときわ会
保体（中）	県教育庁保健体育課指導主事	中学校教頭	（故人）		ときわ会
英語	高校教諭	高校教諭	高校教諭		ときわ会

第３表　「教採研修会」の「講師」の「前歴」と所属派閥一覧

あなたが教師になったとき、児童・生徒に対してどのようことを特に努力したいですか。二つあげてその理由ものべなさい。
○信頼される教師像　○理想の教師像
○教師の責任　○教師にかける私の夢

というものであった。ところがその年の新潟県教員採用試験の小論文の課題には次のような問題が出題された。（問題が未公表のため字句が若干異なる。）。

○信頼される教師になるために、あなたがもっとも努力したいことをなるべく具体的にのべよ。

このような「教採研修会」には当然、批判の声があがり、しぶしぶ中断したが、「教育学部後援会」幹部は批判者を攻撃した。「採用試験指導料」として「講師」へは約二〇万円の「謝礼」が支払われた。このように「派閥」においては社会的公正感覚がマヒしている。たとえば「教頭試験」や「校長試験」も「閥内競争」になっているために、その閥内の出題経験者を「指導者?!」とした「研修会」という名の不正行為が日常的に行なわれており、「教採研修会」はその感覚が露呈したものと思われる。「教育学部同窓会」はその責任について沈黙した。後援会長は連絡紙「大学の庭」誌上で弁明に努めた。ただし、以上のような具体的な事実にはふれなかった。この半年後になっても江口直禎副会長（当時三条二中教頭、一九八六年後援会長が校長をしている木戸中学校教頭に転任。ときわ会、元教育学部同窓会会長）は「昨年、教員採用試験に関し、同窓会員が学生に対しアドバイスの講座をもった。一部の批判的な教官の横槍で中止せざるを得なくなった。しかし、このことは教育学部父兄後援会の総会でもとり上げられ、是非やってほしい旨の要望があった。教官の同意を得て何としてでも再現させてほしい」（「教育新報No八三、一九八五年三月一五日付）とのべており、最近の「大学の庭」No二〇（一九八七年一月三十日付）誌上でも父母の「素朴な願い」を利用していまだに「再開」のキャンペーンが行われている。

新潟県の教員採用をはじめ義務教育行政は「派閥連合」によって行なわれているが、教員採用制度は多くの不透明・不明朗な問題をかかえている。試験問題、採用基準、試験結果などはいまだに明らかにされておらず、「なぜ落ちたのかわからない。」という受験生も多くいる。また一九八五年度教員採用試験（一九八四年）では採用予定者名簿に搭載しながら約一〇〇名が採用にならず（女性が圧倒的に多く、また三月末になって電話で不採用の通告を受けるケースも多かった）、一九八六年度は一次試験の合否で極端な男女

差別を行ない、また結局は名簿登載者を全員採用しても定数枠内で二九名の欠員を生じるという大失態を行なった。この行政の失態のため、少なくとも二九名が教員になれなかったのである。ちなみに一九八四年の義務教育課長は公孫会、八五年はときわ会であり、八六年は公孫会、そして八七年はときわ会である。また自治的活動経験者に対する憲法違反の「就職差別」もいまだに行なわれており、コネ採用の一方で「悪魔の告げ口」による超手続的な不採用も「派閥の黒幕」によって行われている。ときわ会の影響下にある「教育学部後援会」幹部は父母にとっても重大な関心事であるこれらの問題については何もふれなかった。

「初任者研修」の「試行」計画とその受け皿としての「派閥」

「初任者研修」の「試行」が本年（一九八七年）より中越地区で実施されることになった。二年後に新任教員全員に行なおうとするための「試行で」ある。その「実施校」は三十五校でその一覧を第4表に示した。「初任者研修」は週二日程度の「指導教員」による「指導」と週一日程度学校を離れて教育センターにおける「研修」をうけ、そのほか「宿泊研修」や「洋上研修」も計画されている。また「試行実施校」には月一回の割合で「指導主事」が監視にまわってくる。これは本来自主的であるべき（教育公務員特例法第十九条）教員の研修の「上から」の統制であり、また「教諭は児童の教育をつかさどる」（学校教育法第二八条⑥）とした「新任」教諭の教育権限を侵害するおそれもある。「指導教員」には教頭、教諭、または非常勤講師（退職校長など）の中から当該関係学校の校長の意見を聞いて教育委員会が任命することとなっている。新任の先生は職場の民主的な教師集団の中でこそ育てられるべきであるが、今回の「初任者研修」では「新任教員」と「指導教員」のマンツーマンの特別な関係が生じることによって、「新任教員」に心理的圧迫が加わりまた、職場の民主的な雰囲気も損なわれることが懸念される。昨年（一九八六年）、宮城県では塩釜市での「試行」計画に対し、宮城県教組の運動によって県教委に「マンツーマン方式の研修はしない。」旨の約束をとりつけている。

「初任者研修」制度は臨教審第二次答申（一九八六年四月二三日）のなかの「教員の資質向上」にそって行なわれるもので、臨教審路線にそって新任教員を統制・洗脳することを狙っている。その「試行」として、今年度は三十二都府県と四政令指定都市で実施され、そのために約三十億円が使われるが「派閥」はこのような「上から」の指示・方針にいつもきわめて忠実で、その実質的な「受け皿」の役割を果たしてきた。また、今回の「試行」実施に中越地区が「選ばれた」のも各「派閥」の二年後に備えての「練

種別	地域	学　　校	学級数	対象教員	校長派閥	教頭派閥
小学校	長岡市	中島小	14	1	公孫会	公孫会
	〃	浦瀬小	8	1	〃	〃
	〃	四郎丸小	18	2	〃	〃
	〃	栖吉小	19	2	〃	〃
	〃	川崎東小	15	2	ときわ会	ときわ会
	〃	大島小	22	3	〃	〃
	小千谷市	東小千谷小	20	2	公孫会	公孫会
	〃	片貝小	12	2	ときわ会	ときわ会
	見附市	名木野小	21	2	〃	〃
	〃	今町小	26	2	〃	〃
	栃尾市	上塩小	6	1	〃	〃
	〃	栃尾南小	20	2	〃	〃
	越路町	岩塚小	14	1	公孫会	公孫会
	三島町	脇野町小	13	1	〃	〃
	与板町	与板小	19	1	ときわ会	ときわ会
中学校	長岡市	大島中	13	1	公孫会	公孫会
	〃	青葉台中	6	1	新陽会	新陽会
	〃	南中	27	2	ときわ会	ときわ会
	〃	宮内中	24	2	新陽会	新陽会
	〃	東北中	28	2	公孫会	公孫会
	〃	江陽中	15	2	ときわ会	ときわ会
	〃	東中	20	3	新陽会	新陽会
	小千谷市	片貝中	7	1	ときわ会	ときわ会
	〃	小千谷中	22	2	〃	〃
	〃	東小千谷中	12	2	〃	〃
	見附市	見附中	16	1	〃	〃
	〃	西中	13	1	公孫会	公孫会
	〃	南中	14	2	ときわ会	ときわ会
	栃尾市	東谷中	6	2	〃	〃
	越路町	越路中	15	3	公孫会	公孫会
	三島町	三島中	9	2	〃	〃
	与板町	与板中	9	1	検友会	ときわ会
養護学校	長岡市	柏崎養・のぎく分校	6	1	公孫会	〃
	〃	月ケ岡養・あけぼの分校	8	1	ときわ会	〃
	見附市	まごころ養護	7	1	公孫会	〃

第4表　「初任者研修」の「試行」校と校長・教頭の所属派閥一覧

習」のためであって、実際、「試行」実施校三十五校の校長「派閥」は第4表に示したようにときわ会十七、公孫会十四、新陽会三、検友会一とほぼ全県的な「派閥」の勢力関係の縮図となっている。他県での試行では「子どもとのふれ合いの時間が少なくなる」とか「ノートのコピーを提出させられた」とかの問題も報告されているが、「初任者研修」が新任教員の若々しい情熱や個性を押し殺し、自主性を萎縮させることになりはしないだろうか。また、すでに京都府では「初任者研修」後、「研修態度が悪い」という理由で免職処分にされた例が発生しているが、「初任者」の「弱い立場」につけこんで、「派閥」加入の強要が行なわれうることもまた懸念される。

「派閥」の「歴史と伝統」ははたして「輝かしい」か？

ときわ会は創立百十周年を「誇り」、公孫会も九十年の伝統を「誇って」いる。「百十年の伝統を持つ私達のときわ会。これは先輩の残してくれた偉大な財産である。私達は共に活動しあう中で、それを受け継ぎ、更に発展させようと取り組んでいる。」（座談会「ときわの未来を考える」、一九八五年一〇月二六日、ときわ会報号外号）。

既にみてきたように、「派閥」の歴史は恥ずべき歴史である。戦前の新潟、高田の両師範閥の抗争は世論のひんしゅくを買い、新潟県教育界の恥部として「新潟の学閥」は広く世に知られるようになった。また利権を背景にした師範閥視学や校長の教育汚職。軍国主義教育への積極的加担と批判者の弾圧。そして戦後における民主的組合活動の「乗っ取り」と「派閥」による統制。数々の社会的不公正。「派閥連合」による管理職ポストの「窓口一本化」的独占とその「指定席」化・私物化。教育委員会等教育行政への介入。各種団体における役職の指定席化。「同窓会」の派閥化。人事異動における利権支配と差別。人事権を背景にした寄付の強制。「派閥連合」による不透明な教員採用。女性蔑視。大学の自治への干渉と「政治献金」による「政治工作」。学校における教員の統制・抑圧。働くものの権利を無視した歯どめなき労働強化の内側からの強制。民主教育の確立に逆行する教育路線への追随。教員の自主的・自発的研修活動への無理解と干渉。絶えまない「閥内競争」と疲弊する教員。そして何よりも重大なことは、「派閥」はこれらを通じて新潟県の教育界から自由と正義、民主主義を尊ぶ気風をうばい、教師の自発的な活力を阻害し、その心を萎縮させ、卑屈なものに、またある場合には傲慢なものにしてきたことである。これらが「先輩」の残してくれた「偉大な財産」にみえる派閥幹部がおり、また若い派閥会員がいることは喜劇的ですらある。

（つづく）